

世界に於ける魔術の分布 (三)

夏 見 寛 治

以上述べ來つたところのものは魔術中、所謂交感的魔術に屬するものゝ一、二の例に過ぎないが、かく同一の種類に屬する魔術が世界の到るところに一樣に分布されてゐるといふことは注意すべきことで、かゝる分布を見るに至つた原因を探求するために吾々は二つの假設を取る

ことが出来る、一は互に何等の關係なく個々獨立に發生したといふ假設で、人力の頼むべからざるを知つて超自然力に憑依せんとした人間の原始的な心理作用の一致の自然的結果とするもの、他は傳達の假設で、人類の文化史上最も重要な因素たる智識の傳播に依つてこれを説明せんとし、最初或る一地方に於て發達したものが人類の移動に従つて現在の如き分布を見るに

至つたとするものである。しかしながら、この方面よりする魔術の穿鑿をこゝに行ふことは稍煩雜に過ぎる、それ故この問題の解決はそれを後日に譲つて、こゝには前回に引續いて人類の社會的過程の一要素としての魔術の醫術との關係を吟味して見やう。

魔術と宗教との關係或は混同に就ては前回に於てその一端を述べたが、宗教と密接な關係を有する魔術はまた醫術と密接な關係を有つてゐて、そしてこれらの三つのものは三角關係に立つてゐるものである。現代の純科學的見地よりすればこれらの三つは互に獨立したものであるが、若し社會的過程の一としての醫術を歴史的に觀察し、或はそれを未開人種に就て觀察すれ

ばこれらの三つのものは決して獨立したものと
して考へることが出来ない、殊に或る時代又は
或る未開人種間に於ては醫術なるものが全く存
せず、魔術或は宗教的儀式がそれに代つてゐる
加持祈禱、禁厭、蟲封じ等の魔術的、宗教的
magico-religious 方法に依る疾病の治療を今猶廣
く行つてゐるわが國民は世界に於て最も魔術的
要素に富んだ國民の一で、『日本のむかし、もろ
こしの醫藥の方渡らざりし以前は、大方まじな
ひの醫術にて、病を療治いたし候云々』とある
『集義外書』の記載及び『禁厭と藥方とは並びた
るものにて、書記に定療病之法、定禁厭之法と
いひて、歷世用ひ玉へりと見へて……職員令
に、咒禁師二人、掌咒禁事、咒禁博士一人、掌
教咒禁生、咒禁生六人、掌學咒禁といひ、醫疾
令に、咒禁生、學咒禁解忤持禁之法とあり云々』
なる『奇魂』の一文、其他諸多の文獻、口碑に残
されてゐる傳説及び事實はわが國昔時に於ける
魔術と醫術との關係の如何に密接なものであつ
たかといふことを示してゐるものであるが、今

吾々は、世界の各人種間に於ける魔術と醫術、
宗教と醫術或は魔術と宗教と醫術との關係及び
その分布狀態を穿鑿するに先立つて、疾病治療
の方法として魔術を修し又は魔術を信する人種
の疾病に關する概念の如何なるものであるかを
知らねばならない。

疾病に關する概念を構成するものゝ中で、最
も重要な分子は、その原因に關する概念である
この概念は直截簡明で疾病の外貌と直接關係し
てゐるのが通例で、この問題が純醫學的に見て
また興味あるは、未開人種間の醫術もまた現代
の醫術のその如くに、その基礎を病原論及び
對症法に置くことに於てその出發點を一にして
ゐるといふことである。今疾病の原因に關する
一般人類の信念を考察して、吾々はその原因を
大約次の三つに分類することが出来る。(一)人
的原因、これは疾病の原因が或る人間の行動に
直接原因してゐると信するもの、(二)或る靈的
又は超自然的物の行動、これは人間ではないが
多少人格化されてゐるものゝ行動に基くと信す

るもの、(三)これは吾々が普通に自然的原因と稱へるものである。

第一の人的原因として現在吾々に考へ得られるのは毒を盛られたり、傷つけられたりした場合のみで、結局さういふことに基く自然的結果である。第二は今日の正統な醫術では認められないが、神罰、或は祟りとして信せられてゐるもの、基督教徒の所謂『神の御手』の如きがそれで、この信念は今猶多くの人々の腦裡から離れてゐないものである。第三の自然的原因、これは人的或は超自然的原因とは全く獨立したもので、疾病の原因を震境の變化に伴ふ不可避の結果とするもので現代に於ける醫家及び一般人に依つて信せられてゐるところのものである。然るに一方これを未開人種に就て檢すれば、彼等の疾病の原因に關する信念は主として第一及び第二のものに屬し、第三の自然的原因が信せられてゐることは殆ど無いといつてもよいといふことが知られる。咒咀其他の魔術的行爲に依つて人に災禍を下し、危害を加ふる法の存在

はまた未開人間に於ける上記の如き病原に關する信念の存在を證明するものである。未開人の疾病に關する原因論がかくの如くである以上、その治療法が魔術及び宗教の領域に入るは當然の歸結であるといはねばならぬ。

社會學上及び人類學上に於ける魔術なるものゝ概念は中世紀に於て歐羅巴其他の諸國民に依つてこの名のもとに行はれた術に影響されてゐるところが多い。中世紀に於ける魔術中最も人に知られてゐる一つの形式は、非人間的な精靈的のものが活動してゐるもので、これらの精靈的媒介物は疾病其他の現象の直接の發生者であつて、このものが人間の魔術者の力に依つて行使されるといふ信念の存在するところに魔術なるものが認められてゐた、即ち魔 devil を行使する術であつたのである。然るに文化の恩澤に溶さない多くの未開人間にあつては疾病、負傷等の發生の原因に關する觀念がこれとは著しく異つて、多くの場合、因果關係が純人間的媒介者の行爲に歸せられてゐる。(W. H. R. Rivers—

The Fifth Patrick Lectures delivered before the Royal College of Physicians of London in 1915 and 1916.)そしてこの因果關係の法式は常に疾病又は負傷に先行するところのものが明瞭でない場合、即ち原因不明の疾患を説明するために用ゐられるばかりでなく、吾々が一見して自然的原因に基くものであるといふこと知ることの出来る場合に於てさへ用ゐられてゐるのである

例へば、若し人が樹木から落ちて死んだり怪俄をしたりした場合、ニュー・ヘブライズのアンブム Ambum 島民は、その原因を決してその樹の枝が脆い折れ易いものであつたとか、或は登攀者が何かのはずみに四肢の自由を失つたとかいふことで説明しない、必ずそれを妖術者の所作に歸するのである。恐らくこの場合に於けるアンブム島民の心理は、樹に登るといふやうな尋常茶飯事に人が死んだり傷を負ふたりすることは普通にはあり得べきことでないから、何者かゞそれに干與してゐるに違ひない、妖術者か何かゞ故意にその樹の枝を折つたり、或は

幻術者が枝のないところを枝があるやうに見せたりしたかためにその人間が樹から落ちることになつた、といふことにあるらしい。

またこれと同様に戦争に際して人が死傷した場合にも、その罪が、敵の武術が優れてゐたとか、防禦の方法に誤りがあつたとかいふことに歸せられなくて、魔術師が敵の飛道具を嚮導したとか、犠牲者の身體の運動を拘束したとか或は武器の力を鈍らしたとかいふことで説明する、毒蛇に咬まれた場合もまた同じで、それを毒蛇に觸れた場合に起る必然的現象として見ずに、妖術者に依つて故意にその蛇が犠牲者の通路に置かれたとか、或はその蛇は妖術者に依つて特別の力が附與された蛇であるとか、或はまたその蛇は尋常の蛇ではなくて、妖術者が一時その姿を蛇に變へてゐたものと解釋するのである。こゝに於て生ずる問題は疾病及び傷害に關するかゝる信念が、その治療の方法に如何なる影響を及ぼすかといふことである。一見かゝる觀念はそれより何等實際的結果を生じない空虚

な信念であるやうに想像される、然るに事實はこれに全く反して、この信念はこれら未開人の疾病及び傷害に對する處理法の根本を形成し、そして若しこれらの魔術的所爲が犠牲者を死に導いた時には復讐の方法を決定させる。これらの場合に於ける *taboos* の方法はその人間的媒介者を發見すること、その處理法の原則は當該妖術者をしてその惡行を停止せしむべき手段を講ずることである。

前述の如く、未開人種間にあつては、疾病及び傷害の發生が人的原因に歸せられることが多いが、また中世紀魔術のそれの如くに疾病の直接原因が、最初から魔術師の勢力のもとにある非人間的媒介者又は精靈 *demons* の所爲或は魔術的行爲の結果として魔術師が意の儘に行使することが出来るやうになつた非人間的媒介者の所爲に歸せられることも決して尠くない。これらの場合に於ける診斷及び治療は純人的原因の場合と殆ど同一で、治療に従事する者は往々その原因に對抗して魔術的行爲に依り非人間的媒介

者を行使してその診斷及び治療を行ふことがある。

今、疾病及び傷害の原因として信せられてゐるものゝ大部分を占める人的原因の實例を舉げるに當つては、こゝにそれをまた三つの種類に區別することが便利である。第一は或る病原的物質が犠牲者の體內に入れられたとするもの、第二は體內から何物かゞ抜き取られたとするもの、第三は妖術者が或る人間の身體の一部分或は身體に接觸してゐる物體に作用してその人間に疾患を生ぜしむるものである。

以下世界各地の未開人間に於ける疾病及び傷害に關する魔術的宗教的處方の實際に就て少し許り述べて見やう。